

自己評価報告書

平成23年 5月15日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20592594

研究課題名（和文） 発達障害児の地域社会で自立・自律生活できる能力を育てる
看護支援システムの開発研究課題名（英文） Nursing Support Program for the Independence/Autonomy
of Children with Developmental Disorders

研究代表者

大脇 万起子 (OHWAKI MAKIKO)

滋賀県立大学・人間看護学部・准教授

研究者番号：00280008

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：発達障がい児、看護支援システム、ITプログラム、遠隔支援、遠隔教育、
自立・自律生活、地域社会

1. 研究計画の概要

(1) 20年度：生涯型看護支援プログラムと
評価尺度の作成

1) 生涯型看護支援プログラムの開発

①生涯型看護支援プログラム専用の生活行動尺度を作成する

②生涯型看護支援プログラム（支援の内容・方法・組織など）を作成する

2) ITを用いた遠隔支援方法（支援用ITプログラム）の開発

①遠隔支援およびそれに必要な支援内容を調査・検討できるプログラムを作成する

②1)-①, ②を対象者が自宅で自己評価・自主訓練できるソフトを作成する→4 と同時に配信

(2) 21年度：看護師研修プログラムと評価
尺度の作成

3) 看護師研修プログラムの開発

①1)-①で作成した尺度の使用法・評価方法に関する研修資料と指導計画を作成する

②1)-②で作成した看護支援の目的・方法・留意事項などの研修資料と指導計画を作成する

4) ITを用いた遠隔研修方法（研修用ITプログラム）の開発

①3)-①, ②に関して研修を受けた看護師が自宅研修できるソフトと指導計画を作成する

5) 研修効果尺度（研修評価用・支援評価用）を作成する

(3) 22-23年度：看護支援システムの実践・
評価

6) 看護師研修プログラムの実践・評価

①看護師を対象者にして、3), 4)を用いた研修を行う

②生涯型看護支援プログラムを実践後、研修

内容および研修効果を5により評価・検討する

7) 生涯型看護支援プログラムの実践・評価

①発達障害児と家族を対象として、1, 2を用いた支援を行う

②支援を実践後、発達障害児と家族への支援の効果を評価・検討する

(4) 24年度：研究結果の統合分析・最終ま
とめ・発表・報告

2. 研究の進捗状況

平成22年度までの計画実施と残された課題は以下であり、残り2年で改善をする。

(1) 看護師研修プログラムの開発

1) 作成した尺度の使用法・評価方法に関する研修資料と指導計画の作成

対象者の生活能力に応じて設定した課題を1～3個程度含んだ日課を容易に作成できる記録用紙やマニュアルの作成を次年度に向けて完成させる必要がある。

2) 作成した看護支援の目的・方法などに関する研修資料と指導計画の作成（日課・注意事項の説明、業務内容と流れなど）

食事、保清、環境整備などの主な生活行動を含んだ、日課のモデルを容易に作成できる記録用紙やマニュアルの作成を次年度に向けて完成させる必要がある。

(2) 研修用ITプログラムの開発

1) 自宅で研修・評価できるソフトの作成と指導計画の作成

画像、映像、ナレーションの資料作成および各研修の指導計画について、研修者モニターをしてくれた看護師より、実用的ではないので、不要ではないかとの意見があった。理由としては、今回の対象はたとえ障害が同じであっても障害程度や症状の出現が多種多

様であり、視覚教材から得られた知識が先入観となると、個別性に応じた適切なアセスメント・計画・実践ができなくなる可能性もあることであった。一方で、研修者を対象とした視覚教材ではなく、プログラム対象者を対象としたものが有用であると考えられた。

今回の対象では、回数を重ねるごとに改善がみられ高い意欲もみられたため、自宅でもプログラムを継続実施することにより日常動作の習得が確立できると期待できる。対象は、まだ一人では調理方法や手順の判断などができず、支援が必要な段階にあるが、家庭状況（母親が働いており、連日料理の練習を行うことは困難）のため、母親が継続的に自宅での日常動作の練習を行える状況にはなかった。

映像による日常動作の手本の提供は、新しい日常動作の習得を容易にし、習得状況に合わせた段階的指導も容易になるとの意見があった。

また、双方向の通信ツールがあれば、安全面にも配慮した有効な支援が行え、対象者の抱える課題にも即時的に対応できると考えられた。

(3) 研修効果尺度(研修用・実践用)の作成

1) 内容理解度、指導能力、実践技術、指導効果などの数量化尺度について、次年度に向けて、完成を急ぐこととなった。今回の対象は、これまで5年間にわたり関わってきたため、日常生活行動・発達段階など観察・評価しやすかった。しかし、スケールの一般化のためには、初対面の対象を効果的に評価できる必要があると考えられた。

(4) その他

1) 次年度の研修の受け入れ人数について

今回、2名の対象者へのプログラム提供を行ったが、途中から参加しなくなった対象の観察・評価は、全部のプログラムに参加した対象と比べると、課題である握力面の問題に気づけなかったりと不十分な面が多々みとめられた。2名とも今回のプログラムの基盤となる先の研究で作成したディケアプログラムの参加者であり、ある程度、情報把握やアセスメントができていた対象者であったにもかかわらず、このような状況になることから、ある程度、対象者をアセスメントでき、個々のプログラム計画などそのビジョンが明確になるまで、研修1回の受け入れ人数は、1名ずつの方が、有効であると考えられた。

2) プログラムの効果査定について

実践における対象者の課題達成率の集計を行い、プログラム効果の査定が明確にできるようにする必要があったと考えられた。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている。

(理由)

2に示したような実践状況があり、実践現場での使用に耐えうるプログラムの構築には、対象者も研修する看護師も少数固定化し、継続的に実施する方が求める研究資料が得られると考えられ、当初の予定よりも一つ一つの課題に対する検討時間も要するため、全体の進行がやや遅れる状態となっている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 看護師研修プログラムの開発：記録用紙やマニュアルの改善・完成

(2) 研修用 IT プログラムの開発：当初の予定を変更し、対象者用のものを開発する。

(3) 研修効果尺度(研修用・実践用)の作成：改善・完成

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文] (計1件)

(1) 大脇万起子, 鈴木育子, 鳥居央子, 飯田恭子: 知的障がい児の家族支援プログラムにおける同胞への支援. 家族看護学研究, vol. 15, no. 3, 2-9, 2010.

[学会発表] (計2件)

(1) 鈴木育子, 大脇万起子, 加藤さゆり, 法橋尚宏: 発達障がい児への支援 —生活能力実態調査から—. 第30回日本看護科学学会学術集会, 2010. 12. 3. 札幌市

(2) 鈴木育子, 大脇万起子, 加藤さゆり, 法橋尚宏: 知的障がい児が利用している社会資源と関連要因の検討. 第59回東北公衆衛生学会講演集, 22, 2010. 7. 23. 山形市

尚、本研究に関して、平成23年6月25-27日に第10回国際家族看護学会で3題・日本家族看護学会第18回学術集会1題の発表を予定している(すでに採択済)。

[図書] (計1件)

(1) 大脇万起子: 家族システムストレスへの不適合(慢性期) —障害のある子どもと共に生きる家族のケース—. 新しい家族看護学—理論・実践・研究—(編著 法橋尚宏), 259-274, メヂカルフレンド社, 2010.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

研究成果に関するwebページがある。

<http://uribow.org>